

C. アレクザンダー「パタンランゲージ」を素材とする 住み心地観念の記号論的分析

—その1 予備的考察—

○灰山彰好*1 越智奈保子*2

A Semiotic Analysis on the Image of Comfortable House Expressed in
PATTERN LANGUAGE, C. Alexander

HAIYAMA, Akiyoshi*1 OCHI, Nahoko*2

はじめに

住宅の住み心地が一般的に、温度湿度風速などの環境工学的諸条件、照明色彩などの人間工学的諸条件、あるいは交通利便性、コンビニの近さ等々社会環境の条件によって満たされることに特に異論を唱えるいわれはないが、過大な住み要求が環境負荷となってゆく仕組みが次第に明らかになり、自らを被害者に位置付ける環境意識から主体的なエコロジー思想への転換を図ろうとするならば、心頭滅却すれば火もまた涼し—式の極端な精神論はともかくとして、住み心地の観念にいくらかの想像力の支援が必要となる。例えばただ寒いと言わないでキリッとした冷氣と納得すれば、暖房設定温度が3度は下がるかもしれない。微風速を風鈴でキャッチすると涼しさを感じるのは、日本人に特有の条件反射だろうか。駅まで5分よりも30分のほうが、健康的な響きがするのではないか、等々。

住み心地を想像力で補ったケーススタディーはもちろん文芸作品に数多見られるであろうが、読書量に自信を欠く筆者たちゆえに、本報ではC.アレクザンダーが著した環境事典『パタンランゲージ』で妥協したいと思う。本書は建築学ではそろそろ旧聞に属するが、文芸作品と比較すれば十分に新しい資料ということになる。

パタンランゲージ Pattern Language

筆者（灰山）が建築計画学を学び研究し始めた1960年代、当時の大型計算機（大きなビルディングを必要としたので計算センターと呼ばれていた）を駆使して、経験主義的な計画学を超えた論理的思考法を展開してみせたクリストファー・アレクザンダーが、新時代の予感が必要とした若手研究者の間で熱狂的な支持を得ていた。『コミュニティとプライバシー』（1963）、『形の合成についてのノート』（1964）、『A Pattern Language which Generates Multi-Service Center』（1968）等々初期の著作で紹介されたアレクザンダーの計画理論の眼目は、記録機能と創造機能を備えた言語 Language に似せて、世界各地の優れた事例から収集記録した環境単位

Pattern をコンピューター上の環境生成文法によって再構築し、未知の環境設計へと展望を拓こうというものである。ほとんど無限の組み合わせを論理的に精査する必要があり、当時流行した人工知能の開発研究に似て、コンピューターの進歩を待ちながらの壮大なプランであった。しかし数学科出身とはいえアレクザンダーもやはり建築家、「都市はツリーではない」と宣言して論理解への期待を自ら否定し、そして1977年刊行された『A Pattern Language, Town・Building・Construction』¹⁾ は、さながら聖書のような体裁を備えた253章からなる環境デザインの福音の書であった。本書の特色は、各章共にハンドブック的な解答というよりは、何を問題にすべきかという意味への間でびっしり埋め尽くされていることであり、色々と考えるところのある読者（大概是学生）なら必ず首肯する点が見つかり、勇気付けられる。

本報（その1）では、アレクザンダー得意のレトリックを解明記録する方法について述べる。また訳語については、その翻訳書『パタン・ランゲージ』²⁾ を合わせ参照するものとする。

住み心地の記号表現

意味とは何か。例えば「住まい」の意味を知るには、まず複数の住まいを見ることである。立派な家、質素な家、北の家、南の家、石の家、木の家を観察すれば、「住まい」の類似と差異が自ずと分かり、イメージが形成される。

レトリック (変形操作) E		住み心地 (環境価値) C
Pattern E	緑化 (環境機能) C	
	木陰 E	憩い C

E: Expression 表現 C: Contents 内容

図1. 環境<記号>の意味作用

以上を『モードの体系』を著したロラン・バルトの<意味作用の単位³⁾>の枠組みでまとめると、図1のようになる。Pattern の一例 60.Accessible Green は、表向きは一般的都市緑化の必要性を表示 denote するものであ

るが、しかし、Accessible（身近な）と形容されると唯の緑化でなくなる。Pattern Language では唯の緑が、道が、家が、窓が、テーブルが、わずかに変形操作されることで別の次元、我々がデザインとって表そうとしている価値表現の次元に「身上がり」することが期待されるのである。本報でいう住み心地とは、アレクザンダー得意のレトリックに含意 connote された環境価値を指すものとする。

本報は目的は 253 個の Pattern（以下パタン）に適用されたレトリックと暗示される住み心地のリストを作成して試みることであり、その 1 では分析の下準備としての Pattern Language 全体の分類整理を行う。

パタンの構成

253 個のパタンは町やコミュニティを定義する大きなものから、地区、通り、戸外空間をへて建物・住宅内部に入り、家具小物で終る。これらの段落は、大きく 3 とおり、小さく 35 とおりに区分される。それぞれの最初のパタンを挙げると、1.Independent Region、95.Building Complex、205.Structure Follows Social Space であり、末尾の最小パタンは 253.Things From Your Life である。Region, Building, Structure, Things（小物）には微妙な修飾と変形操作が加えられ、即物的なそれぞれであっても、工夫次第で立派な設計テーマ、プロジェクトのタイトルと成り得るユメが啓示される。アレクザンダー一流の変形操作とは何か。言い当てたい空間価値は何か。著者の口から語られる場所は皆無であるが、読み進むにしたがってある方向へ収斂してゆく実感が湧く内容を備えている。もちろんそれがアレクザンダーの意図するところであろう。

次に 60.Accessible Green を例にとり、一つのパタンの構成をみてみよう。気軽に出かけられる公開空地の必要性が述べられ、身近 Accessible の限度についてのセンターの調査研究データが公開されている。緑地の近くに住むか働く人ほど緑地への関心が高く、緑地から離れる人ほど無関心になるので、緑地利用は指数関数をなすことになる。身近の限度は徒歩 3 分のことである。遠くに大きく立派な緑地があっても駄目、とアレクザンダーは断定する。61.Small Public Squares にも緑が備わるので、これらは別の視点から取り上げた同じテーマといえる。ともかくにも、緑地、広場は小さくないと身近にならない。ここから、身近が第一のテーマ、続いてそれを達成するための第二のテーマ、といった階層性の存在も予感できる。

ところで、アレクザンダーの変形操作は Accessible のような平易な形容だけではない。例えば 139.Farmhouse Kitchen（農家風キッチン）のような料理のネーミングに似た暗喩もある。しかし内容を読めば、家族共同作業の大切さを説くものであることがすぐ分かる。

考察

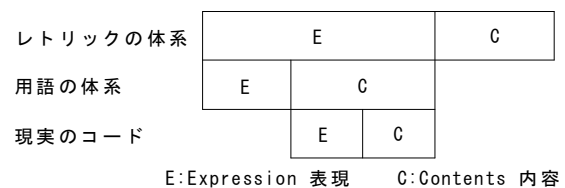
住み心地の記号表現を研究するとき、リストアップすべき要点は、緑地など計画の対象物である環境機能、変形操作のテクニック、比喩的暗喩的に表現しようとしている住み心地（環境価値）の三つである。ではどこから着手したらよいか。本報では最も個数が少ないと思われる住み心地（環境価値）の要約作業を中心に、論を進めてゆきたいと考える。

あとがき

記号論については、かつては研究数をはるかに上回る議論があったが、ここでは環境というテキストを読解する技術として実用的に捉えている。かえって無用な混乱が起きなければ幸いである。

注記

- 1) Christopher Alexander et al., Center for Environmental Structure, Oxford University Press, 1977
- 2) 平田翰那訳、鹿島出版会 1984
- 3) 『モードの体系』ロラン・バルト著佐藤信夫訳、みすず書房 1972。現物の服装の心理効果よりも、モード雑誌に書かれた表意システムこそがファッションの本質と達観する記号論の代表的成果著作。



物がことばによって生命を与えられる過程は、上掲図三種の意味作用体系の集合体である。物はことばを借りて、何らかの意味内容を表意する記号となる。用語の体系でのごく表面的な意味の表意は denotation と呼ばれ、内容面(C)が一組のシステムを形成する。ファッションの目的であるさまざまな含意の表現・レトリックは connotation と呼ばれ、表現面(E)が一組のシステムを形成する。実際の人工物は現実のコード（狭義のシステム）をもつのみであるが、想像力の世界では、人の心を動かす大きな力を発揮する。

*1 広島女学院大学生活科学部教授 *2 同大学院生